

地域のオープンスペースとしての道路空間活用の可能性に関する研究
ー横浜市関内周辺の道路空間活用事例を対象にー

木村 夏輝

指導教員 野原卓准教授 高見沢実教授

1. 序章

1-1 研究の背景と目的

近年、都市の歩行者空間の重要性が認識されている。道路空間においては、本来の機能である通行に加え、滞留や活動の場としての活用が活発になるなど自由な使い方が求められており、道路管理者である行政や商店街等の沿道組織、エリアマネジメント組織といった多様な主体が活用に取り組んでいる。このような活動は沿道地域の豊かさに直結すると考えられることから、地域主体が自ら活用に取り組むことが重要になる。

本研究では多様な道路空間活用が集中している横浜市の関内地区周辺に着目し、道路の活用自体を目的とするのではなく、沿道を中心とした地域主体が企画・運営に取り組み、地域のまちづくりにつながるような「地域のオープンスペース」として道路空間を活用している事例を対象とし、その内容や地域主体の関与を分析することで、道路空間活用が地域の豊かさをもたらす可能性を示すことを目的とする。

1-2 言葉の定義

本研究における言葉の定義を下表に提示する。

表1 言葉の定義

道路空間活用	道路空間を通行に限らない多様な活動に有効に使用し、良好な空間づくりを行うこと。
地域のオープンスペース	地域主体が企画・運営に取り組み、豊かな場や賑わいづくりを通して地域の豊かさを生み出す空間。
地域主体	通り単位で形成される沿道組織（商店街振興組合、町内会）や、生活・活動をしている沿道の住民・事業者及びそれらが主として属する組織。

1-3 研究の構成と方法

まず（１）背景と目的を示し、（２）関内周辺の道路空間活用から調査対象を選出する。その後（３）選出した事例について文献・Web 調査と主体へのヒアリング調査を行い、対象とする道路に対してそれぞれ、企画や空間構成等の内容と地域との関係性を考察するために「①活用の内容」、地域主体が企画運営に取り組ん

だきかけを考察するため「②活用の契機」、地域主体による活用の運営をする仕組みを考察するために「③活用の運用体制」と、３つの視点を設定して分析を行うことで、（４）結論を導く。

2. 横浜市関内周辺の道路空間活用と研究対象の選定

2-1 関内周辺の沿道組織

関内周辺では基盤の目状に街路が構成されている。沿道組織として、海岸線に平行な道路には町内会が、垂直な道路には商店街振興組合があり、維持・管理活動や、道路の活用等多様な取り組みを行っている。

2-2 関内周辺の道路空間活用と対象の選定

日本大通りは多くの来街者が利用するメインストリートであり、オープンカフェ等の活用や歩行者の滞留を見越した再整備が行われ、実行主体として日本大通り活性化委員会が組織されている。

馬車道や元町商店街、イセザキモールでは商店街振興組合を中心に早くから来街者の増加を狙った道路空間活用が行われ、商店街として賑わっている。

上記の道路が広範囲を対象にする一方で、その他2000年以降に順次活用されてきた事例の中には、複数の地域主体によって活用がおこなわれており、より沿道地域との連携が強いと予想できる道路が見られる。本研究ではこのような活用が展開されている、吉田町本通り、入船通り、関内桜通りの３つを対象とする。ヒアリング調査はそれぞれ以下の主体に対し行った。

表2 ヒアリング調査の対象

	道路空間活用	主催	ヒアリング先
吉田町本通り	吉田町アート&JAZZ フェスティバル	吉田町アート&JAZZ フェスティバル実行委員会	吉田町名店街会
	吉田町まちじゅうピアノガーデン	(一社) 吉田町名店街会	
	吉田まちなかキャンプ	(一社) 吉田町名店街会	
入船通り	神奈川地ビール&地元フード祭	神奈川地ビール&地元フード祭実行委員会	沿道店舗 A
	住吉町入船通り秋祭り	住吉町入船通り祭り実行委員会	
	住吉町入船通り春祭り	住吉町入船通り祭り実行委員会	
	Park(ing) Day	Fun! Public Space! YOKOHAMA	
関内桜通り	道路のパークフェス	横浜市芸術文化振興財団	横浜市芸術文化振興財団
	かんないテラス	かんないテラス実行委員会	関内まちづくり振興会

A study of streets' potential as an open space for local community - case studies of streets in Yokohama -
Natsuki KIMURA (Supervisor : Taku NOHARA, Minoru TAKAMIZAWA)
Keywords : street, utilization

3. 事例研究による実態の整理と分析

3-1 対象とする道路の概要

吉田町本通りは片側1車線で、沿道には吉田町名店街（商店街）が存在する。活用は商店街組織である吉田町名店街会が中心に取り組んでいる。吉田町町内会 は名店街会と役員が共通するなど結びつきが強く、両者により道路の再整備に関する議論も行っている。

入船通りはパーキングメーターが設置されている一方通行の道路で、全体が住吉町に含まれている。住吉町町内会が沿道組織として清掃等の管理、再整備の構想、道路空間活用等を行っている。

関内桜通りはパーキングメーターが設置されている一方通行の道路で、沿道組織として関内桜通り振興会があるが、活用は横浜市芸術文化振興財団、関内まちづくり振興会が中心に行っている。沿道には芸術文化振興財団の事業¹⁾でギャラリーやアトリエに転用された建物が集中している。関内まちづくり振興会は、関内桜通り振興会と会長が共通していること、沿道店舗や事業者が多く所属することから地域主体と捉える。

3-2 対象事例の実態と分析

各事例の実態について、先に提示した3つの視点から整理し表3に示す²⁾。以下視点別に分析を述べる。

①活用内容

吉田町本通りでは沿道の画廊と連携したアートイベントや、沿道のバー・居酒屋と連携したビアガーデン、入船通りでは沿道店舗による露店、関内桜通りでは地域のクリエイターによる企画や沿道店舗のテラス席と、いずれの事例においても沿道の建物内で行われている活動を基に屋外での活動として企画されており、沿道と連携し、道路ごとの特徴を生かした活用内容が見られた。また共通して、体験型企画や飲食スペース・居場所づくりが行われており、運営側と参加者の交流機会を生み出すことで賑わいを後押ししていると考えられる。

②活用の経緯

吉田町本通りでは名店街会が町おこしや商業振興を目的として沿道店舗や住民どうし繋がりを生み出すこと、入船通りでは東日本大震災を受け暗さがある中で地域を盛り上げたいという沿道店舗Aの思いから、地域の店舗で連携すること、関内桜通りでは地域のクリエイターが協働できることを、それぞれ狙いとして道路空間の活用に至っていた。いずれも地域主体どうしの繋がりがづくりに注目しており、道路空間活用は地域の関係性づくりに有用だと考えられているとわかる。

また、沿道の活動を活かし、地域主体による活用に

表3 各事例の実態整理

	①活用内容	②活用の契機	活用の体制
吉田町本通り	〈吉田町アート&Jazz フェスティバル〉 アート作品の展示・販売や体験型ワークショップ、ジャズのライブ演奏等を行う。店舗や住民の繋がりを狙いとして毎年春に開催している。 〈吉田町まちじゅうビアガーデン〉 車道を使い沿道店舗による露店と飲食スペース、パフォーマンズ用のステージを設置し、路上でビールを始めとした飲食物を購入し楽しむことができる活用。春から秋に年間4回程度行われ、町内外からの来街者がある。 〈吉田まちなかキャンプ〉 西側半分の車道の上にテントを設置し1泊2日のキャンプを行う活用で、2019年に開催された。町内会と連携しまちの防災訓練として位置づけられ、炊き出しや防災ワークショップ等が行われた。	・吉田町名店街会が負担金の大きい野毛大道芸の共催を中止したことをきっかけに、2000年より吉田町独自のイベントを開始。町おこしや商業振興を目的に、店舗や住民の繋がりを生み出すことを狙い道路活用を行う。 ・「吉田町アート&Jazz フェスティバル」は沿道に画廊が多く名店街会の会長自身も画廊のオーナーであったことからアートをテーマとし、その後専務理事のアイデアでJazzが加わった。 ・「吉田町まちじゅうビアガーデン」は、バーの店主が連携して行っていたイベント「バーストリート」をヒントに、道路を使い店舗ごと違うビールを一堂に出すというアイデアが名店街会から生まれ活用に至った。 ・「吉田町まちなかキャンプ」は名店街会による路上キャンプのアイデアを、町内会と連携したまちの防災訓練として位置づけ開催に至った。	・いずれの活用も名店街会が中心となり運用している。 ・2015年より役員と会員店舗及び町内会の間の情報共有を目的にした定例会が月に1〜2回開かれており、活用の企画や運営の話合いはこの会議で行われている。 ・開催を重ねる中で、「吉田町アート&Jazz フェスティバル」では吉田町画廊と出演ミュージシャンへ、「吉田町まちじゅうビアガーデン」ではイベントに積極的な店舗から吉田町イベント実行委員会を組織して、運営の一部を名店街会から地域の個別店舗等へ分散させる工夫が見られる。
入船通り	〈神奈川地ビール&地元フード祭〉 沿道店舗Aの前の車道を中心に、周辺店舗が露店を出し、路上の飲食スペースで楽しむことができる活用。2012年より入船通りで行われた。 〈住吉町入船通り秋/春祭り〉 横浜地ビール&地元フード祭を住吉町町内会が引き継ぎ開催。活性化と認知度のアップを目的として町内の店舗による飲食販売や物販が行われ、年に1〜2回行われている。主催が変わり範囲が入船通り全体へ広がったが、密度を上げるため4〜5丁目を中心に年々集約してきている。 〈Park(ing) Day〉 ソトノバが全国6か所で同時開催した取り組みの1つであり、沿道店舗A前の車道の上に什器を設置して居場所づくりが行われた。沿道で買った飲食物を持ち込み、読書や楽器演奏などの活動が見られた。	・東日本大震災を受け世間に暗さがある中、地域を盛り上げたいと考えた沿道店舗Aが付近の飲食店に声をかけ「神奈川地ビール&地元フード祭」を開催した。初回は確保できた別の場所で行われその効果を実感し、店を構える入船通りでの開催に至った。 ・個人店舗が行うより地域の活動と位置付け道路を使いやすいという考えから2014年より住吉町町内会に主催が移管し、「住吉町入船通り秋祭り春祭り」が開始された。 ・「Park(ing) Day」では、公共空間活用に取り組むFun! Public Space! YOKOHAMAのメンバーに沿道店舗Aの関係者が含まれていたことから、入船通りが開催地に選定された。	・「神奈川地ビール&地元フード祭」では、沿道店舗Aが中心となって調整や準備に動き、地域の店舗が協力し運営していた。 ・住吉町町内会に主催が移り、町内会のみでの開催は負担が大きいという判断から住吉町入船通り祭り実行委員会が組織され、沿道店舗Aや活用に参加する町内の店舗等が参加し運用体制がつけられている。 ・「Park(ing) Day」はFun! Public Space! YOKOHAMAとソトノバにより運用されたが、Fun! Public Space! YOKOHAMAと沿道店舗Aの共通メンバーを介して町内会と調整が行われ許可申請を代行することとなった。また沿道店舗Aと向かい側の店舗がテイクアウト販売をするなど部分的な協力が見られた。
関内桜通り	〈道路のパークフェス〉 関内外のクリエイターの活動を公開する「関内外 OPEN!!」プログラムの一つとして毎年秋に開催。居場所づくりや、地域のクリエイターによるWSなど体験型の企画が行われ、子供から大人まで多様な世代が参加した。 〈かんないテラス〉 新型コロナウイルス感染症の感染拡大により影響を受けた地域の飲食店の経営を助けるため、路上をテラス席として有効活用する社会実験として、3回（内路上は2回）開催された。テラス席の他トークライブやワークショップなどのプログラムも行われた。	・横浜芸術文化振興財団と地域のクリエイターのやり取りの中で、不特定多数の人が活動に触れること、クリエイターが協働できることが道路空間の利点として見出し、芸術不動産が立地する関内桜通りの活用に取り組み始めた。 ・互いに異なる世代の集客を得られる相乗効果から、交差する弁天通りの「関内フード&ハイカラフェスタ」（主催：関内まちづくり振興会）と同日開催になり、魅力を見出した関内まちづくり振興会が「道路のパークフェス」の主催を引き継いだ。 ・「かんないテラス」は2020年4月に発令された新型コロナウイルス感染症拡大防止のための緊急事態宣言に伴い中止していた地域食堂のさくらホームレストランが屋外空間のテラス席による開催を模索しており、歩きやすい街を目指して関内の道路再整備に向けた実験の機会を探していた関内まちづくり振興会の思惑と合致したことで開催に至った。	・「道路のパークフェス」は主催の芸術文化振興財団が開催に向けた調整を行い、企画は地域のクリエイターが中心に運営した。 ・2019年より主催が関内まちづくり振興会に移行し、芸術文化振興財団は主催とクリエイターとのやり取りを補助する立場に変わった。 ・「かんないテラス」では関内まちづくり振興会の地域主体への呼びかけにより、地域主体を集めた実行委員会が組織され、活用に向けた議論の場と連携体制が整えられた。

至る過程は通りごとに異なっており、それぞれの地域の実情に合わせた方法が見られた。

吉田町本通りでは、沿道事業者を取りまとめ地域の活性化に取り組む吉田町名店街会が活用の発端となり、日ごろからやり取りのある地域主体から道路空間活用につながるモチベーションやアイデアを拾い上げて活用につなげていた。(沿道組織主導タイプ)

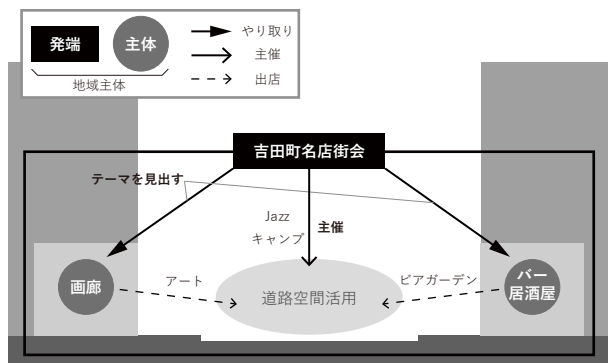


図1 吉田町本通りの活用契機

入船通りでは沿道店舗Aの働きかけから地域の店舗が連携し、そこに町内会が加わっていた。個別の店舗のモチベーションが少しずつ集まり道路活用へと発展する様子が見られた。(沿道店舗主導タイプ)

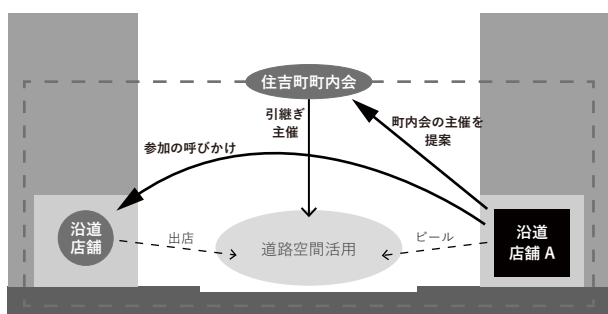


図2 入船通りの活用契機

関内桜通りでは、地域のクリエイターと芸術文化振興財団のやり取りから活用が始まり、地域主体の関内まちづくり振興会がその活用に魅力を見出し、主催を

引き継いでいた。地域外の主体とのやり取りを発端に地域の個性を見出し、後に地域主体による活用に発展する過程が見られた。(外部組織関与タイプ)

③活用の運用体制

吉田町本通りでは活用を主導する吉田町名店街会が

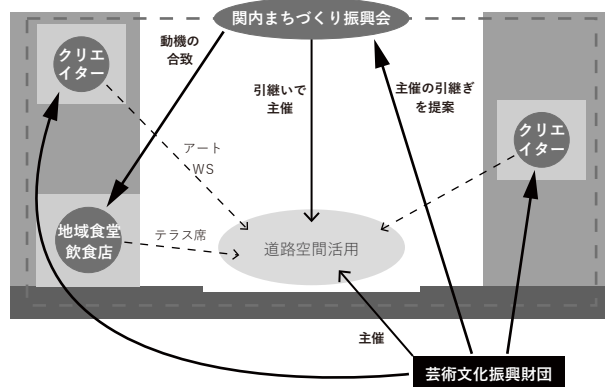


図3 関内桜通りの活用契機

各地域主体を繋ぐ役割を持っており、活用を重ねた2015年に地域主体間の情報共有を目的とした名店街会の定例会が設定された。この中で活用についての議論も行われ、地域主体が連携する体制が構築されると捉えられる。また、開催を重ねる中で、参加者や実行委員会へ運営の一部を任せるなど負担を分散させる体制の工夫が見られた。(図4)

入船通りでは住吉町町内会が活用の中心になった際、運用のために地域の店舗等を巻き込んだ実行委員会が形成され、以前より多くの店舗が運用側に回るようになった。これにより地域主体が連携して活用に取り組む体制が構築されたと考えられる。(図5)

関内桜通りでは、道路のパークフェスの主催を引き継いだことをきっかけに活用に取り組み始めた関内まちづくり振興会が、関内桜通りに関係する複数の地域

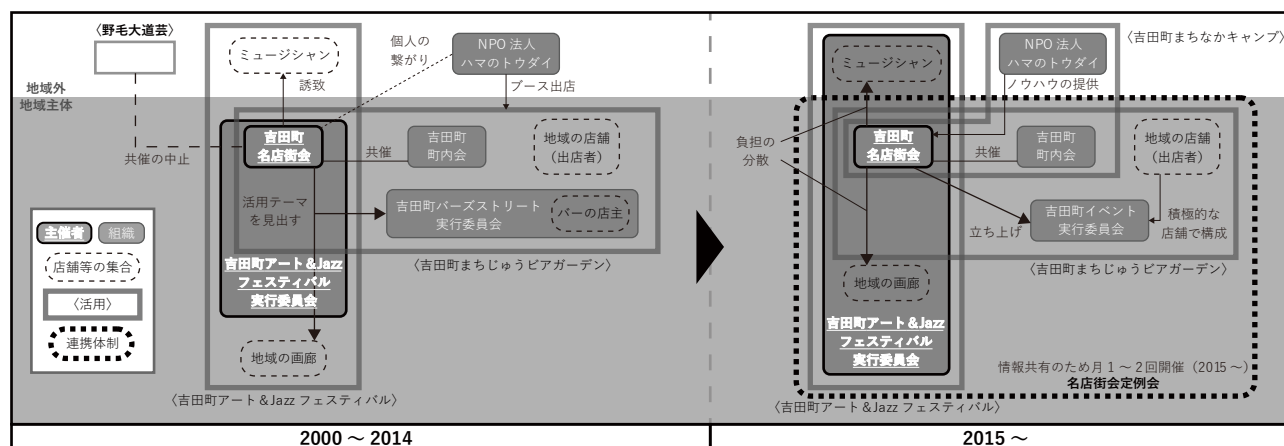


図4 吉田町本通りにおける活用の運用体制の推移

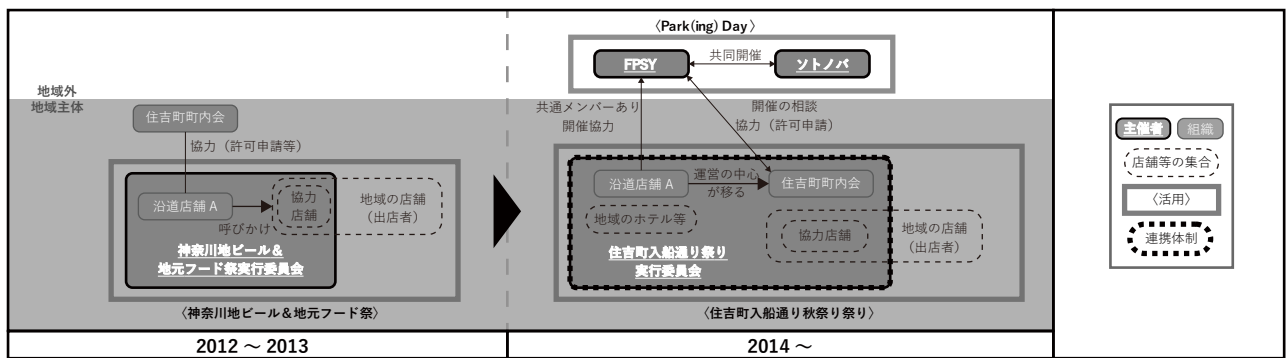


図5 入船通りに関する活用運用体制の推移

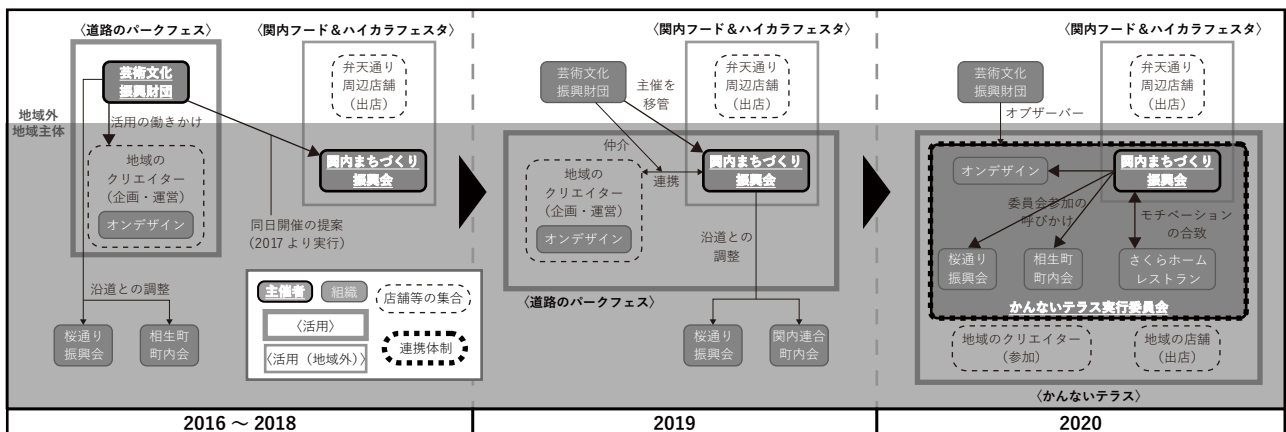


図6 関内桜通りに関する活用運用体制の推移

主体とつながりを持っており、かんないテラスの実行に際して地域主体に声をかけ実行委員会を形成し、地域主体の連携体制が構築されていた。

いずれの事例も、まちづくりに広く関わり多くの地域主体との繋がりを持つ組織（吉田町名店街会、住吉町町内会、関内まちづくり振興会）が活用に取り組むことで連携体制が整えられており、それらを取り込む組織の柔軟性も見られた。

4. まとめ

分析を通して以下のことが地域のオープンスペースとして道路空間を活用する上で重要であると示す。

①沿道の活動を基に、道路空間を活かした内容の展開

沿道の活動から活用のテーマを見出すことで、沿道の個性を活かし、地域主体と連携した活用につながり、体験型の企画や滞在空間を入れ込むことで、多くの来街者の利用を促し、賑わいを生み出すことにつながると考える。

②個々の商店・テナントの想いを重ねた形の活用検討

バーなどの店舗や画廊、クリエイターといった地域の個々の主体の想いが、沿道組織や特定の店舗、地域外組織などの主体とのやり取りを通して引き出されることで、地域主体が連携して道路空間を活用する契機

を生み出すことにつながり、地域の個性あるテーマの道路活用に至ると考える。

③地域主体が連携した実行組織の形成とその柔軟性

名店街会や町内会、まちづくり振興会のような沿道全体を対象として活動する組織を道路活用巻き込み、地域主体の連携体制を構築することが重要であり、そのような地域主体を、運用体制を変えながら上手に取り込む柔軟性を持つことが有効であると考えられる。

以上のことから、沿道地域の個性を引き出して賑わいを生み出し、地域主体どうしの連携体制を構築する契機となることで、地域のオープンスペースとしての道路空間活用が地域のまちづくりに寄与する可能性であると考察する。

今後の研究課題として、横浜以外の事例との比較分析、活用時の空間構成や参加者の活動調査からの検討を行うことが必要であると考えられる。

【脚注】

1) 芸術文化振興財団の芸術不動産事業。関内・関外地区の空き物件を、スタジオやアトリエ、ギャラリーなどの民営民営型のアーティスト・クリエイターの活動拠点として活用し集積させ、まちの活性化を図る。

2) 参考文献、各活用広報紙による調査及び、活用主体へのヒアリング調査によって得られた情報を基に、分析視点にもとづいて整理を行った。

【参考文献】

1. 横浜国立大学（2017）：公共空間活用実証事件に関する研究—横浜市都心部のストリートマネジメント調査—

2. 横浜国立大学都市計画研究室（2018）：公共空間マネジメントに関する研究